

■テーマ展

「岩手の鳥っこ」

生物部門 学芸第三課長 藤井忠志

Part I 会期：平成18年5月20日(土)～7月2日(日) 会場：特別展示室
Part II 会期：平成18年9月15日(金)～10月15日(日) 会場：MCG

Part I 会期：平成18年5月20日(土)～7月2日(日) 会場：特別展示室

関連事業 その1) 展示解説会：平成18年5月20日(土)14:00～15:00 ゲスト有

その2) 県博日曜講座：平成18年6月25日(日)13:30～15:00 地階講堂にて

演題「岩手の野鳥～バードウォッチングの真髄に迫る～」

講師：日本野鳥の会盛岡支部長 中村茂氏 注) 事前申し込み不要

Part II 会期：平成18年9月15日(金)～10月15日(日) 会場：MCG

関連事業 その1) 展示解説会：平成18年9月30日(土)14:00～15:00 ゲスト有

その2) 特別講演会：平成18年9月18日(月)13:30～15:30 地階講堂にて

演題「わが国の野生鳥獣保全に関する問題点」

講師：山階鳥類研究所所長 山岸哲氏 注) 事前申し込み必要 先着140名まで

〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34

岩手県立博物館「岩手の鳥っこ特別講演会」係

往復はがき・FAX・E-mailにて住所、氏名、電話番号を明記してください。

FAX:019-665-1214 E-mail torikko@iwapmus.jp(受付限定で開設)

申し込み受付期間：平成18年8月21日(月)～9月8日(金)

平成18年度、生物部門のテーマ展「岩手の鳥っこ」は、変則的ですが今回に限り会期を2期に分けて行います。9月15日(金)から19日(火)まで、岩手大学等を中心に開催される日本鳥学会盛岡大会にあわせて共催展を開催する関係からです。I期目は野鳥の繁殖期にあわせた5月からで、II期目は鳥学会にあわせた9月からということで準備を進めました。

■はじめに

私たちが暮らす岩手県内では、日本産公認鳥類の約60%にあたる344種が確認されており、他県に勝るとも劣らない野鳥県ともいえます。

県民「もしもし、あのうー、うちの猫が今朝、喉の赤い小鳥をくわえてきたんですか。。。？この鳥の名前、なんていいますか？」

これだけでは判別不能ですから、その他の特徴を聞いてみた後に、

学芸員「ノゴマだと思えます」

県民「博物館でほしいですか？」

学芸員「ノゴマだとすれば、なかなか手に入らないので、是非、提供していただだけま

せんか？」

県民「はい、わかりました」

このような電話でのやりとりが年に10数回あり、着払い等で届けられた鳥の死体は、地下の冷凍庫に拾得者、拾得年月日、拾得場所、拾得時の状況等のデータを入力した後、大切に保管されます

岩手県立博物館には1980年(昭和55年)の開館以来、県民の皆さんから提供いただいた鳥類の死体を多数保管していますが、毎年毎年、生物部門の限られた予算を、鳥類剥製の委託予算として計上しています。その中で、剥製として新たな息吹を与えられたものは、約200点にものぼります。また岩手県産鳥類標本でありながら、なかなか入手困難な重要資料は、購入等を行いこつこつと収集してきました。かれこれ30年近くになりますから、他館にはない充実したコレクションになりつつあります。

これら剥製標本はただ単なる展示品としての価値だけではなく、20世紀から21世紀の県内に生息する野鳥の推移を知る重要な資料なのです。換言するなら、岩手県の自然史をもの語る証拠記録でもあります。



日本唯一の標本・ハワイシロハラミズナギドリ

■日本に1体しかない稀少な標本

長年保管されてきた収蔵庫内の剥製標本ですが、これまで何度か気がかりだったものが数体あり、なかには鳥名すら怪しいものがあるのです。今年1月末、山階鳥類研究所バンダーのC君にボランティアで手伝ってもらい、同定作業をしているときのことでした。

一番上段の棚の奥に、ほこりをかぶって色あせたみすばらしい海鳥の剥製があるのです。剥製を手にとった私は、ミズナギドリの類ということはわかりましたが、なにになとは断定できなかったので、C君に「何だと思う？この剥製は？」とたずねました。さすがのC君も、この剥製には困り果て、ふたりで「何だろう？アナドリ？～ミズナギドリ？」と見回しました。そして、

ヤマザクラを輪切りにした展示台の裏側をみると、「ハワイシロハラミズナギドリ」という初めてきく名前があったのです。

手元の文献などで調べてみましたが、その名前が記載されていたのは、日本鳥類目録改訂第6版と岩手県産鳥類目録だけでした。しかし写真も掲載されていないことから、本当にこの名称と合致しているのか？判明しないのです。

地元野鳥の会や鳥類研究者、そして鳥の研究では日本最高の水準を誇る山階鳥類研究所とのやりとりで、この剥製のルーツを記載した文献があることがわかりました。元神奈川生命の星・地球博物館（現：同館名誉館員）の学芸員で著者の中村一恵氏からは、論文（山階鳥研報1979年）の提供と電話をいただき、ようやくこの標本の由来や生態の一部が判明しました。

それによると、1976年（昭和51年）9月4日、滝沢村篠木小学校近くの水田で衰弱したこの鳥が拾われ鳥獣保護センターで保護されたのですが、翌日、介護のかいもなく死んでしまったのです。そして、1978年（昭和53年）発行の「岩手の鳥獣」（岩手県環境生活部自然保護課）には、「オオシロハラミズナギドリ」として記載されました。

その記述に疑問をもった海鳥研究者の中村氏は、標本が保管されている宮古国民休暇村を訪ね計測等を行い調べた結果、「ハワイシロハラミズナギドリ」と同定したのです。この鳥の学名は、*Pterodroma phaeopygia sandwichensis* と表記しますが、*Pteron* = wing で *droms* = running で、*Wing runner* = 「翼をもった走者」の意になります。

またハワイ原産で、地元で“UAU”と呼ばれているそうですが、生態もほとんど知られておらず、ボン条約（移動性の野生動物種の保護に関する条約）でも最高ランクとして記載されている希少種です。しかも日本で見つかったという記録は、岩手の

一件しかなく、標本も国内では唯一という「お宝」であることまで判明したのです。



アオバト 撮影；四ツ家孝司氏

■鳥の声のききなし

山登りが好きな知人から、知人「藤井さん、先週、山でテントを張ってたら夜、変な鳥が鳴いてましてね！私「どのように鳴いてましたか？」知人「ヒョーヒョーと鳴いて、最後にチンと鳴いたんですよ。あまりに気持ち悪かったから、翌日すぐおりてきました」私「それはトラツグミというツグミの仲間です」

鳥を知らない人と会話する場合、このような鳥の声が名前のききとてなることがしばしばです。鳥の鳴き声を人間のこばに置き換えてわかりやすくしたのが、「鳥の声のききなし」です。代表的なのが、ウグイスの「法華鏡」、センダイムシクイの「焼酎一杯、グイー」、ホトトギスの「特許許可局」、イカルの「お菊二十四」、ホオジロの「一筆啓上仕り候」、フクロウの「五郎助奉公」などですが、この鳥のききなしを研究されていた方が、当時、京都大学に講師として在籍されていた川口孫治郎先生です。川口先生は、1934年（昭和9年）に秋田県八幡平で初めてクマゲラを捕獲し、幻の鳥

の存在を日本中に知らしめた私の尊敬する人物です。

閑話休題、日本で最も奇妙な鳴き声を発する野鳥は、アオバトという野鳥です。アオバトの鳴き声の聞きなしを表記しようと思ってもあまりにも困難ですから、ここでは活字としては示しません。今回の展示では、アオバトをはじめとする代表的な鳥の声も皆さんに披露します。

■おわりに

今回のテーマ展では、ふだん博物館収蔵庫奥等に保管されている稀少な標本なども含め、岩手県民の財産でもあるこれら鳥類剥製標本を一堂に公開し、岩手県産の鳥類に親しんでいただきます。

また、県内在住で日本を代表するアマチュアカメラマンの方々から提供いただいた迫真の野鳥生態写真など100点を展示し、より深い野鳥の情報を交換できる場になりたいと考えています。県民の皆様のご来館を、心よりお待ちしております。

2006年 岩手県立博物館 テーマ展

岩手の鳥

Part I 5月20日 → 7月2日

Part II 日本鳥学会共催展 9月15日 → 10月15日

岩手県立博物館
〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷24
TEL. 019-661-2831 <http://www.pref.iwate.ac.jp/020102/>
●開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで) 月曜日休館(休日の場合は翌平日)
●入館料 大人300円 学生140円(高校生以下無料) *20名以上は団体割引